
ポケモン不思議のダンジョン 冒険日記

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 冒険日記

【Nコード】

N9221M

【作者名】

桜

【あらすじ】

ここでは裏話やキャラ設定、番外編を中心にやっていきたいと思います。

u r a b a n a s h i 名前の由来と相棒選び (前書き)

最初は名前の由来、相棒を選んだ理由です！

キセキ「それでは……」

どうぞ！！

urbanashi 名前の由来と相棒選び

冒険日記始まりました!!

活動報告でも書いてあったのですが、ここでは裏話やキャラ設定、番外編やお知らせなどやっていきたいと思っています!!

キセキ「早くしよー!!」

アチャモ「キセキの由来、知りたいよー!」

今回は一回目なのでキャラの名前の由来、相棒は^{パートナー}何故アチャモ! ?などの裏話をやりたいと思います♪

キセキ「私の由来かあゝワクワクするなあゝ!」

アチャモ「相棒^{パートナー}になった理由かあ……ドキドキする!!」

えゝとまずはキセキの由来からですね。

「奇跡^{ポケモン}をおこす人間」という意味でキセキです!

キセキ「え………?期待してたのに!?!」

え………? いい意味だよ!? 詳しく言うとな「今にも奇跡をおこしそうな瞳」かな?

キセキ「瞳?よく分かんないよー!」

そのうちキセキが人間だった頃の話を書きたいなあ……。

キセキ「人間だった頃に関係あるのね……？」

……。つぎはアチャモが相棒パートナーになった理由です！

アチャモ「適当に言わないでね」

アチャモは実は最初じゃなかったのです！ 最初は相棒パートナーはエネコでした。でもエネコは調べると主人公候補だったので……どうしても女同士がよかったのでアチャモにしました。

アチャモ「……ワタシエネコの代わり？」

……。キ、キセキの由来と相棒パートナーの決め方は書きたかったのです。今回書けて嬉しいです♪

キセキ「つぎは私が人間の頃の話を書いてほしいな！」

話をだいぶ進めないと書けないよ？
あのキャラが出ないと！

キセキ「誰？ 私に関係するポケモン？」

うん。君の親友だよ♪……ネタバレかな……？

キセキ「……誰……！？」

今回は番外編の予定です！

アチャモ「……次回もよろしくね……」

まだ落ち込んでる？

u r a b a n a s h i 名前の由来と相棒選び（後書き）

アチャモ「ワタシって、簡単に決めたんだね……」

うん……。でも今はアチャモにして良かったと思ってますよ！
性格もあってますし！

キセキ「私の由来はよくわかんないなあ。瞳かあ……」

人間の頃の話をつか書こうと思います。
まだまだだと思えますが……。

アチャモ「次回もよろしくお願いします！」

bangaihen 初めてのプレゼント (前書き)

今回は番外編です。

キセキ 「あれ？探検隊の方は？」

…。
本当はそっちを更新したいのですが、原稿がまだなので…

キセキ 「早くしてよ？それより番外編をどうぞ！」

bangaihen 初めてのプレゼント

「起きろおおー！」

ドゴームの声が聞こえた。

「う……うう……。おはよキセキ」

「おはよう」

挨拶を済ませて、トレジャーバッグや波動のリボンをつける。
そして二匹で朝礼に向かう。

「みっつー！みんな笑顔で明るいギルド！」

「みんな♪元気にいくよ」

「おおー！」

誓いの言葉をおえて皆いつものように仕事をしに行く。

「ワタシ達はいつもの依頼かお尋ね者だよね」

「多分ね。行こっかあ」

「おい！お前達」

掲示板に向かう二匹をペラップが呼び止める。

「ん？なあに？」

「お前達、今日の仕事は……」

「依頼でしょ？」

「お前達の仕事は今日はないぞ」

「え？」

キセキとアチャモが驚きの顔をする。

「ないって？どういうことなの？」

「実はな依頼はもう違う弟子が何個も受けてないのだ」

「ってことは今日は仕事休み？」

「そうだ」

二匹は喜んでいない。むしろ喜べない。

今喜んだらペラップが怒って仕事を無理にでもさせられそうだからだ。

「じゃあ今日は何をすればいいの？」

「うーん……好きなことでもやっておきなさい」

いい終えるとペラッは仕事があるのか急いで外へ出て行った。

「何する？」

「……。自由行動は？」

アチャモがしたいことを言った。

「自由行動？ どうして？」

「たまには……ね？好きなもの買ったりして後で見せあいっこして。いいよね……？」

アチャモがどうしても自由行動したそうに見えたのでキセキは自由行動をとることにした。

「じゃあ私はトレジャータウンをうろろするよ」

「そっか。ワタシギルドに戻るのは遅くなりそうだからペラッ
プに言っといてくれるかな？」

「え？ うんいいよ？ でもどうして？」

「え……それは……え……と……」

何故かと聞くととても焦るアチャモ。

その焦りっぷりを見て、これ以上聞いてはいけないとキセキは思
い、気をつかう。

「言えないならいいよ。でも気をつけてね？」

「うん。ありがとうキセキ」

そうしてアチャモは急いでどこかへ行ってしまう。

(……どうしたんだろう、アチャモ……)

そう思いながらもキセキはトレジャータウンへ向かう。

「こんにちわ、キセキさん」

声が聞こえた方を向くとバネブーがいた。

「バネブーさんだ！どうしたの？買い物？」

「あ、いえ。ここの近くに住んでいて、たまに散歩するんです。
キセキさんはアチャモさんと一緒ではないのですか？」

「今日は仕事が休みで自由行動してるんだよ」

「そうですか。これからどこに行くのですか？」

「んーとね……とりあえずカクレオンのお店かな？」

「あ、一緒ですね！」

「そうなの？一緒に行こっか？」

「はい!!」

「いらっしやいませ♪」

「何買おっかなあ？」

キセキが商品を見ながら必要な物をじっくり探す。

「あ、これいいですね」

バネブーが言っているものはパワーバンダナだ。

「うーん……どれにしよう……?」

キセキは悩むがバネブーはささっと決めていく。

「あ、これにしようかな？」

キセキが見つけたもの……それは赤いグミだ。

「グミですか？でも赤いグミは炎タイプが好きなグミですよ？キセキさんに合わないのでは？」

バネブーが言っている通り。

グミはいろんな種類があり、色で分けられている。だから自分に合うグミ、合わないグミがある。

ノーマルタイプならば白いグミが合う。

キセキが見つけた赤いグミはキセキ……つまり草タイプには合わない。

「アチャモがね、このグミ好きだからあげようと思って……」

「そうですか。アチャモさん喜びますよ！」

「う、うん!!」

「ではワタシは買ったのでこのへんで……」

「うん。またね〜！」

そして別れた後にキセキはグミを買おうとしたが……。

「800ポケ!?高い!?!」

キセキには払えない値段だ。
キセキは自分のポケを見る。

「75ポケ……」

「75ポケですか？無理ですね」

キセキはこの時後悔した。
どうしてもっと貯めなかったのか、どうして節約しなかったのか
……。

「75ポケで買えるものはある?」

「そうですねえ……」

「やっぱり……だめ?」

「あ、これなら買えますよ!」

そう言っ取り出したものをキセキに渡す。

「わぁ〜可愛いし綺麗!!これいいの?」

「どうぞ!実はそれ売れないのでどうしようか考えてたものなんです」

「こんなに綺麗なのにね。75ポケでいい?」

「いや、35ポケでいいですよ」

「ありがとう!これならアチャモ喜びそう!」

「まいど!」

アチャモに渡すものを買った後、キセキは海岸にいた。

「うわぁ！凄く綺麗」

キセキがきた時間はクラブ達が泡を噴出す時間。

「空も暗くなってきたし、もうそろそろギルドに戻ろう」

キセキは少し急ぐような感じで戻っていった。

「あ、おかえりなさい！」

チリーンがキセキに声をかけた。

「ただいま。アチャモいる？」

「アチャモさんですか？いますよ」

それを聞いてキセキは嬉しそうな顔をして、アチャモがいる所へ向かう。

「アチャモ！早かったね！」

「キセキは遅かったね」

「ん？何かしてるの？」

キセキはアチャモの後ろにあるものに気付き、それを見ようとする。

「だ、だめ！見ちゃだめ！」

アチャモが焦ってものを隠そうとする。

「そ、そうなの？」

アチャモの焦りっぷりを見たキセキは不思議に思いながら見ないようにする。

「今日は疲れたしもう寝よっか」

「そうだね。そうしょ」

二匹はごまかすように寝ていた。

そしてキセキとアチャモは気まずくなっていた。

キセキがアチャモに渡そうとしていたものも渡せなくなっていた。

そんな日々が続いたある日の夜……。

キセキが寝ようとした時、アチャモが声をかけた。

「キセキ、目をつぶって」

「え？なんで？」

「お願い！」

「うん……」

そして目をつぶるとアチャモが何かを取り出してキセキの頭につける。

「目を開けていいよ」

そう言われ、目を開けると、キセキは驚いた。

「え……？これ、花……？」

「うん。キセキにプレゼントしようと思って自由行動の日に花を買いにいったんだよ」

キセキは納得する。

「キセキ知ってる？花にはその花の色や花のイメージでつけら

れた言葉……花言葉があるんだよ」

「へえ〜！すごいね」

「それでねその花の花言葉はね……『君がいて幸福』なんだ。
その花はゼラニウムだよ」

キセキはとても嬉しかった。

アチャモが自分^{キセキ}という幸福と思ってくれてるなんて……。

「そうだ！私もアチャモへのプレゼント！」

そして取り出したのは綺麗な宝石のようなバンダナ。

「バンダナ？綺麗！」

「アチャモはリボンもバンダナもしてないでしょ？だからアチャモにつけてほしいなあって」

アチャモはバンダナをつけていない。

リボンはキセキがつけているがバンダナは間違えて売ってしまったのだ。

「ありがとう。バンダナ欲しかったんだ。大切にするね！」

アチャモはバンダナをつける。

「似合ってるよ！！可愛い！」

「えへへ……キセキも花似合ってるよ！」

「ありがとう。この花御守りにするね」

キセキは花をとってリボンにくつつける。

「そろそろ寝よっか！」

「そうだね。おやすみー」

「おやすみー」

そうして二匹は寝たふりをしていた。

お互い貰ったものを眺めていた。

そして二匹は同じことを心の中で思っていた。

「……やっぱり私達の出会いは運命だね……！」

二匹の絆はより深まり、信頼も深まった日だった。

b a n g a i h e n ー初めてのプレゼント（後書き）

皆さん知ってますか？調べる所によって花言葉は少し違うんです。
だからゼラニウムの花言葉を調べても今回のと少し違うかもしれません。

bangaihen 仲間達の過ごし方（前書き）

更新遅れました。すいません!!

キセキ「しょうがないよ。探検隊を更新しすぎたんだよ」

今回はリクエストされた話を書きました！

リクエストはまだまだ募集していますので、くるのを楽しみにしています。

キセキ「ではどうぞ！」

bangaihen 仲間達の過ごし方

「みっつー！皆笑顔で明るいギルド！」

「皆♪元気にいくよ」

「おおー！」

誓いの言葉を言い終えた後、ペラップはキセキ達に今日の仕事を言った後、何かぶつぶつ言っていた。

「セカイイチがまた減っている……。親方様はすぐに食べるんだから……。まったく……」

セカイイチとはプクリン親方の好物である。

「今日もまたセカイイチをとりに行かなくちゃならないじゃないか。親方様に言っても今度は盗み食いするだけだろうな。はあ……」

ため息をついた後ペラップはセカイイチをとりに行った。

「ビッパ、忘れ物はありませんか？」

「大丈夫だと思うでゲス」

「思うだけではだめですわ！ちゃんと確認しないとだめですわ
ー！」

そう言っているのはギルドの弟子、キマワリとビッパだった。

「確認したでゲスよ。探検に行くでゲス！」

「そうですわね。早く行って終わらせましょう」

ビッパとキマワリは一緒に探検に行く準備をしていた。

「今回は洞窟ですわ。洞窟は迷いやすいですので、不思議玉と食料はたくさん必要ですわ」

「詳しいでゲスね、キマワリ。頼りになるでゲス」

二匹は探検に向かった。

「今日も気合いをいれていくぞ、ディグダ！」

「はい！ドゴームさん！」

朝から気合いがはいっているのはドゴームとディグダ。

「今日も失敗なしでいくぞ！」

「はい！」

そんな二匹を見て一匹のポケモンは聞こえないようにこう言った。

「今日も気合いがはいってますね。仕事を頑張るのはいいことです」

言ったのはチリーンだった。

聞こえていたのか二匹はもっと気合いがはいっていた。

「ふう……グミとリンゴと……」

食堂でチリーンは夕食の用意をしていた。

「ビッパさんもおかわりするのでやっぱりもつと多い方がいいかしら……親方様はセカイイチですよ。キャッ♪」

チリーンは照れながらセカイイチを用意したとか。

「グヘヘ……まだ壺は使えないなあ……」

そう言っつて変な笑い方をするのはグレッグル。
いつも後ろの壺をいじっている。
何をしているかは不明。

「ぐうぐう……ぐーうぐう……ぐうぐう……」

親方の部屋ではプクリン親方が目を開けたまま寝ていた。

「セカイイチ……?」

寝言でそう言っつた後、おきた。

「セカイイチ食べようかな♪でも昨日の夜に食べてかなり数が減ったんだよね……。今頃ペラッはセカイイチをとりに行つて

るかな？わくわく♪」

そう言うとき、プリンはまた寝てしまった。

「ヘイヘイ！今日も楽しく探検しようぜ！」

「ヘイガニさん。落ち着いて下さい」

弟子のヘイガニは、依頼を受けて、依頼主のサニーゴと探検していた。

「ヘイヘイ！場所はここでもいいかい？」

「はい。ここまでありがとうございます」

サニーゴはダンジョンからトレジャータウンに戻っていった。

とりあえずヘイガニの依頼は成功したらしい。

「海は広いな……。海のように広い心を持ちたいものだ……」

海を崖から眺めているのはダグトリオというポケモン。
デイグダの父だ。

ダグトリオもギルドの弟子だ。

だが、ダグトリオは海を愛しており、ギルドの仕事をさぼることも少ない。

「……………」

無言のまま海を眺めていた。

ギルドの仲間達の一日はこうして過ぎようとしていた。

ちなみにペラップはセカイイチを運ぶのに苦勞して夜遅くに帰ってきたらしい。

bangaihen 仲間達の過ごし方（後書き）

キセキ「私一回もでてないよ!？」

仲間達がメインですからね。仕方がないことにしてね？

キセキ「うゝ……分かったよ。そして私からリクエストがあるんだよ!」

なんでしよう？

キセキ「人間の頃の話を……」

無理です。次回も楽しみにして下さいね。

b a n g a i h e nーありがとう……ただ、その気持ちを……（前書き）

今回はひさしぶりの番外編です！

キセキ「サブタイトルは何？」

見れば分かります！

そしてこの話はキセキ×ナイトです♪

ナイト「やったあ！！俺とキセキだ〜♪」

ナイト目線ですが、誰か目線って難しいですね。

それで、この作品は原稿は書いてなくて、思いついたまま書いたの
で、下手です。

でも確認はしたので大丈夫だと思います。

ナイト「ではどうぞ〜♪」

b a n g a i h e n ーありがとう……ただ、その気持ちを……

「ナイトー！起きて！！」

そう言って俺を起こすのは、俺の好きな人ー……キセキだ。

「……あれ？キセキ……？なんでここに？」

「え？約束したから来たんだよ？」

俺は最初キセキが何を言っているのか分からなかった。

「覚えて……ないかな？」

「……………うん。覚えてない」

「そっか。じゃあ思い出すまで待ってるよ」

そう言った後、キセキは俺に花を渡してきた。

キセキはギルドに戻っていった。

「なんだ？約束……？」

俺は必死に思いだそうとするが、思いだせない。

「そういえばこれはなんだ？」

キセキが渡してきた花を見る。

なんの花か分からない。

色は薄い紅色だ。

「なんの意味があるんだよ……」

どうしてキセキが花を渡してきたのか、約束とは何なのか……。まったく分からない。

「そこのあなた！何か悩みがあるだろう！私の占いで解決しないか？」

「……は？」

なんだこいつ……。偽占い師か？

「あ、失礼。私はメガニウム。占い師だ。損はさせないから、占いをしないか？」

「は？なんで占いなんだ？」

「お前、何かに悩んでいるだろう？我には分かるのだ！」

なんなんだ、こいつ……。関わりたくないな。

「いや、占いはいい……。じゃあ……」

逃げようと思ったが腕を掴まれていた。

「遠慮はいらない。一回150ポケだ。そこに座りなさい」

いや、本当にいいんですって。

これって強制的だろ？

「パパー！帰る時間だよ！」

向こうからチコリータが走ってくる。
え、パパ？

「だが、しかし……」

「遅くなったらママが心配するでしょう！？いくよ！！」

チコリータはメガニウムを連れていった。 助かった……。

俺は海岸に座って、海を眺めていた。

「そのあんた！いい花持ってるねえ」

ん？誰だ？

俺は振り返る。

そこには、キレイハナがいた。

「その花を使って、普段言えない気持ちを伝えない？」

……普段言えない気持ち……？

「その花で、花束を作るのさ！！」

俺はキセキを思い浮かべた。

「作ってくれるのか？」

「ああ、今ならただ作ってあげるよ！」

「……………作ってくれ」

「ほお〜！あんた、誰かに告白かい？それともプロポーズかな？」

「……………感謝の気持ちを伝えるだけだ！！」

「まあ、頑張りな。応援してるからさ！ほら、出来たよ」

うわぁ、綺麗な花束……。

「ほら、さっさと渡してきな！！」

「ありがとな！！」

俺はギルドについた。

キセキ、喜んでくれるだろうか？

「あれ？ナイト？」

「キセキ！よかった！！」

俺はキセキに花束を渡す。

「え！綺麗な花束！！」

キセキは喜んでくれたみたいだ。

キセキが花束を持つとまるでそこに女神さまがいるように綺麗だ。

「ありがとう。……約束、守ってくれたんだね」

「約束？それが……？」

「え！覚えてないの！？………約束は、感謝の気持ちをもの
で表そうって約束したよね！？」

そういえば、そうだ。そんな約束してたな。

でも俺はものでも言葉でもこの気持ちを表すのは無理だ。

だって伝え切れないほど、君に感謝してる。

君が好きだ。

「ナイト？どうしたの？」

「キセキ……」

「ん？」

「
あ
り
が
と
う
」

bangaihenーありがとう……ただ、その気持ちを……（後書き）

ナイト「中途半端じゃないか？なんか恋愛って気もしないし……」

まあ……そうですね。

恋愛にしようとしたらこういう風になりました。

満足できなかった人はすいません！！

ナイト「アチャモはでないし、変な奴ばかりでてる……」

アチャモが好きな人、ごめんなさい！！

メガニウム、久々に登場です。

番外編にはだしてあげたいですね。

ナイト「はあ……」

ナイトの性格が変わってる気がします……。

また時間があったらキセキ目線も書きたいです。

それでは♪

bangaihen 相手を思いやる気持ち (前書き)

番外編です♪

キセキ「はやいねえ〜?」

番外編は面白いからかな? どんどん話うかンできますし!

キセキ「探検隊は〜?」

もうすぐ更新しますよ。

土曜日か日曜日に更新できたらいいんだけどね……。

この話はアチャモ×ナイトです。
難しい……。

bangaihen 相手を思いやる気持ち

ワタシは仕事の依頼が終わった後、たまにだけれど海岸に行っている。

今日もそうだ。

「あれ？アチャモ!？」

「あ、ナイト？」

海を眺めているとナイトが声をかけてきた。

「アチャモ一人か？キセキはいないのか？」

「うん。キセキはギルドに戻ってるよ」

ナイトはワタシの言葉を聞いた後、ワタシの隣に座る。

「……アチャモは探検が好きか？」

「え?……うん、好きだよ」

「そうだよな〜! アチャモは探検をしている時、とてもいい表情^おになるから」

「……それは……キセキと一緒にだからだよ。ワタシ一人じゃ探検隊になる勇気もなかったから」

自分でそう言ってキセキとの出会いを思いだしていた。
あの時は驚いたなあ……。

「キセキか？……アチャモはキセキが大事なんだな」

「うん！とても大切な相棒なんだよ」

その時、一瞬だけど……ナイトが切ない笑顔をしてた。

「ナイト？」

ワタシが声をかけるとナイトははっとしてこっちを見た。

「悪い。ちょっと昔を思いだしてた」

そういえばナイトの過去って聞いたことがないなあ……。

「ナイトは、相棒はいないの？信頼できる相棒……」

「相棒か……。少し前ならいたな」

ナイト……相棒いたんだ……。

男の子？それとも女の子……？

「でも、相棒と言うより、信頼できる奴だったな」

「ナイトに信頼されるって、羨ましいな……」

あれ？ワタシ……何言ってるんだろ……？

「そうか？……でも俺さ、アチャモも信頼してるぜ？」

……え？ワタシを？……ナイトに言われたら、とても嬉しいよ……？

「ワタシも、ナイトを信頼しているよ」

聞こえるか聞こえないくらいの声で言った。聞こえているかな？

「アチャモ、どうかした？顔赤いぞ？」

「そ、そんなことないよ！」

「そうか？ならいいけど……」

自分でも分かってる。今、ワタシの顔が赤いことも。とても胸がドキドキしていることも……。

「アチャモは、この景色が好きか？」

いきなり声をかけられたのでビックリした。ふと前をみると……キセキと出会った時の景色があった。

「うん！この景色は好きだよ！！いつも綺麗だし……ずっと見ていたいと思うよ」

「俺もこの景色が好きだ。いつまでも見れたら……いいのにな」

ナイトと見るといつもより綺麗に見える。ナイトとワタシって二人きりになれる時間なんてそんなにないから、この時間はもう少し

し続いてほしいな。

「ナイトとこの景色が見れて嬉しいよ！」

「え！？嬉しいか？俺と見て……。キセキと見たほうがよかったんじゃないか？」

「キセキと見たら楽しいよ。ナイトと見ても楽しいよ！」

「アチャモって素直だな。……。俺もアチャモと見ても楽しい。今度は皆で見れたらいいのにな！」

「うん！今度は皆でみたいな。この景色を……」

「ほら、アチャモはもうギルドに戻る時間じゃないか？」

「あ、そうだね！じゃあ戻るね！」

「送っていくよ。まだ話したいこともあるし」

その言葉で、ワタシがどんなに嬉しいかあなたは知らないんだろうな。

「じゃあ、送ってもらおうかな？」

「おう！」

ナイトに話しかけられると嬉しいし、ドキドキするんだ。

こんな想いをさせてくれたのはあなたが初めてだよ。

だからこれからもワタシをドキドキさせてね？

bangaihen 相手を思いやる気持ち（後書き）

アチャモ×ナイトはどうでしたか？

メインはキセキ×ナイトなのでまあ……アチャモ×ナイトは少ないです。

アチャモとナイトは難しいですね。

一定の距離感を意識しながら書くのは……。アチャモの想いはどんな想いなのでしょうかね？

また書いてみたいですな♪

bangaihen 君は僕の宝物（前書き）

更新しました！

今回はキセキ×ナイトです。

ナイト「俺とキセキか。本編ではキセキと絡むのは少ないからなあ……」

でも冒険日記では絡んでるでしょ？

ナイト「ここだけじゃん……。いつか俺もキセキに告りたい」

いつかね。

キセキに想いは伝えてほしいなあ。

ではどうぞ！

bangaihen 君は僕の宝物

「ナイトゥ。探検に行こう!」

キセキは海岸に来て、俺の腕を引っ張る。

「探検? 俺と?」

「うん! ナイトと行きたいところがあるんだ!」

……俺と行きたい場所?

そんなこと、キセキに言ってもらえたのは初めてなので、俺は心をウキウキさせる。

「で、でもね……危険なダンジョンで、それなりのレベルが必要なんだけど……」

キセキから誘っておいて、それかよ……。でも俺はキセキが願うなら、どこでも連れて行く。

「だから、何度言わせんの? 俺はキセキを守る騎士なんだ。騎士は強いだろ?」

「うん。そうだったね。ナイトは私を守ってくれるんだよね」

キセキが可愛く笑う。

その笑顔をずっと見ていたい。

その笑顔に何度心をうばわれただろう。

何度助けられたんだろう。

「早く行こうよ!! 早くみせたいんだ」

俺は返事をして、キセキとそのダンジョンに向かう。

「うう……強いよ……」

キセキはかなりのダメージを受けていた。今、俺の目の前に五体もの敵がいる。

最初は十体もいた。苦戦しながらも倒したのだが、まだ残っている。

五体のうち、一匹めのビジョット。翼をうつつで攻撃してくる。

「キセキ、危ない!」

俺はキセキを背負い、安全な場所へ移動する。

「キセキはここで待ってろ」

「え? でもそれじゃ、ナイトは……」

「俺はアイツらを倒してくる」

「え！？ 危ないよ！」

キセキは心配してくれるが、ここに来たいと言ったのはキセキだ。
キセキの願いはかなえてやりたい。

「キセキはしっかり休め。俺は大丈夫だから」

俺は敵のところへ行った。

キセキを傷つけたくない。

辛そうなのを見てられない。

どれくらい戦っただろう。

五体なんとか倒せたが、体が傷だらけだ。 早くキセキのところ

へ行かないと……。

なのに体が動かない。

もう無理かもしれない……。

そう思ったときだった。

「ナイト！！」

俺のところにキセキが寄ってくる。

「ナイトは無茶すぎだよ!! どうして……そんなボロボロになるまで戦うの!？」

キセキが珍しく怒っていた。

涙を流しながら。

俺はキセキを泣かせたくない。

ずっと笑ってほしいのに。

「ごめんね……。私も一緒に戦ってたんだよ……」

「……キセキ、可愛い」

俺はキセキをだきしめた。キセキを包み込んでやりたい。

「ナイト……。これ、食べて」

キセキはオレンの実を俺に差し出した。

オレンの実を食べたら回復した。

やっぱりオレンの実は便利だね。

「じゃ、行くか？」

「……まだ、だめだよ。少し回復したからって気をぬくとまた倒れるんだから」

俺はそれを聞いて、キセキのとなりに座った。

「もうすぐ奥底だよ。……あ、ついた！」

キセキがはしゃぎまわる。

まるで猫のようだ。言ったら怒られるから言わないけど。

「ナイト！！見てよ！」

キセキに声をかけられ、顔をあげる。

おもわず声をあげてしまう。

「綺麗な景色でしょ？ナイトと見たかったんだ」

凄く綺麗なところだ。まるで天国のよう。

「キセキ、女神だ〜！」

俺はキセキにギュッとだきついた。

「ナ、ナイト！？何するの！？」

「このままでもいいさして」

「……………うん」

キセキのてれた顔は可愛い。

君の全てが愛しいよ。

君が俺のこと好きじゃなくてもいいんだ。

キセキは強がりだけ

ど、たまに見せる子供のような瞳。

キセキを誰よりも想うよ。

キセキの傍にいるし、絶対離れない。

誰かを好きになることを、君が教えてくれた。

生まれ変わってもまた君を好きになる。

きつと君を見つけたす。

俺とキセキが出会ったのは、運命と思う。君は何よりも大切だよ。

君は僕の宝物だから。

b a n g a i h e n ー君は僕の宝物（後書き）

最後のところが「僕」になってますが、そこはサブタイトルにあわせるためです。

スルーしてくれてかまいません。

つぎはアチャモ×ナイトかな……？

でもそのまえに探検隊を更新しないと……。

bangaihen 休日の日 (前書き)

今回は久々のポケモンが主役です♪
少し人気のあったキャラ？
ではどうぞ！

bangaihen 1 休日の日

「ひさしぶりの休日だな。チコリータは遊びに行ってしまったし……。何をしようか」

彼は占い師であり、娘を愛する親……メガニウムだ。

「うむ……たまには散歩をしようではないか。家の近くを散歩するか」

「あなた！ちゃんと暗くなるまえに戻ってくるんですよ」

散歩をしようと家を出ようとしたメガニウムは彼の妻であろう者に、まるで子供を扱うような口調に少しムツとする。

「なんだ？我が子供だと言うのか？」

「ええ、出会った頃にくらべれば少しはマシになりましたけど。でもあなたはワタシにとったらあなたは随分子供です」

妻はクスクスと楽しそうに笑う。

今より子供っぽかったメガニウムはどんなものだろうか。

「う……。出会った時の話はいいじゃないか……。わ、我は散歩に行ってくる！！」

出会った頃の自分を思い出したのか、メガニウムの顔は真っ赤だ。

「気をつけて下さいね。道に迷っちゃだめですよ」

妻の言葉にメガニウムはふうっとため息をつく。
自分は、どれだけ子供扱いされているのだろう。

「ん〜！ここはいいなあ。ふだんの疲れがとれる」

メガニウムがいるところは花や木、草が綺麗に揃っているところだ。

森林といえいいのだろうか。深い森だがこの場所には太陽の光がよくあたり、道に迷う者は少ない。

「ここは草タイプにとったら楽園だな。今度はチコリータと来たいものだ」

メガニウムはチコリータを言うと我が妻を思い出した。

「そういえばここであの者と出会ったな」

二匹はここで出会い、惹かれあって結婚し、子供を授かった。
まるで遠い昔のよう。

「……この村が住みやすいから我也来たが……ここはやはりいい村だ」

メガニウムの住んでいる村はそんなに有名ではないし、住んでいるポケモンも少ない。けれど、ポケモン同士は仲がよく、村は大きな事件はおきない。この村の一番の自慢といえば自然が多いこと。

川を流れる水も綺麗だし、森は多いし、空気は汚れてない。

「我はこの村が大好きだよ。故郷みたいなものだ」

しばらく心地のよい風にあたっていると娘の声がする。

「パパー！！いるんでしょ？でてきなさーい！！」

「む……ぼーっとしてたようだな。おおー！チコリータ！迎えにきてくれたのか！」

「ママがね、パパが迷子になってるから見つけてきてって！パッたら、こんな森に来てるんだもん。この森は好きだけど……時間忘れちゃうからなあ……」

「そうか？さあ、帰ろうか。ママが待ってる」

「おかえりなさい！あなた、遅いんだもの。心配したわよ。チコリータ、見つけてくれてありがとうね」

「今日の夕飯はなんだ？」

「グミとリンゴの盛り合わせよ。飲み物はオレンの実を使ったものにしようかしら」

「どれも我が好きなものだな。いつもわるいな」

「あら、感謝なんて珍しいですね。いつも感謝なんて言わないのに……」

「たまにはな。ほら、早く料理してくれ。腹が減ったからな」

「あ、そうですね。デザートは何にしようかしら？」

大人なのにデザートまでつくのかとメガニウムは苦笑した。
この二匹は似た者同士である。

「ママー！デザートはね、モモンの実を使ったものがいいなあ！
大好きなんだ♪」

「ああ、モモンケーキね。甘くておいしいわよね。できるまで
パパと遊んでいてね」

「うん」

夕飯が出来上がるとメガニウムの家からは賑やかな声が聞こえて
いた。

bangaihen 休日の日（後書き）

メガニウム「我が主役なのだよ♪」

のんびりしたお話もいいですよね。

恋愛ばかりじゃ飽きると思いますし、つまらないですしね♪

チコリータ「だから家族話にしたんだね」

今度は奥さんの正体をばらそうかな♪

リクエストお待ちしてます♪

メガニウム「なら儲けの仕事を……」

b a n g a i h e n―疲れた理由は……(前書き)

なんだかいつもより文章がひどいです。

分かりにくいところもたくさんありますが皆さんのイメージにまかせます!!

文章が上手になりたいなあ……。

bangaihen 疲れた理由は……

「〜♪俺は頑張るぞ〜♪やればできる!!」

ナイトはトレジャータウンででていく準備をしていた。
持っていくものや余計な物などの整理をしていた。

「……ん？あいつはどこかで見たことがあるような……？」

ナイトはこちらに向かってくる二匹のポケモンを見てそう言った。
二匹のポケモンはナイトに気付いたのか一匹は不気味な笑顔で、
もう一匹は誰？、というような感じで見てくる。

「お前は!! このまえ我に占いを頼んだブイゼルではないか!
」!

「げえ!! 無理矢理ポケをとろうとしたインチキ占い師!!」

「ん？インチキ占い師ではない!! 本物の占い師だぞ我は!!」

ナイトは逃げようとしたが、前みたいにつかまった。

「前は占いができなかっただろう？今日は占ってやろう!!」

「お、俺は急いでるんで……じゃあ……」

「遠慮はいらない。さあ、一回150ポケだ」

「パパ! 誰なの? このブイゼルさんは?」

ナイトはメガニウムの後ろにいたチコリータに目を向ける。

一瞬、キセキに見えたがキセキではないと判断し、必要以上近寄らないことにした。

「俺はナイト♪カーレツヂ……キセキとアチャモの仲間だ♪」

「キセキさん達の？そっかぁ！ナイトさん、よろしくね。パパの娘のチコリータだよ」

ナイトはニコツと微笑むとメガニウムを見た。 どうやら、逃げることは難しいみたいだ。

「ナイトさんって女の子が大好きだと思っていただけ全然違うね！ワタシには触れないし！！」

「え！？俺は女が好きなわけじゃないし！」

「え？だって噂では、キセキさんにベツタリだと聞いたよ？」

「そ、それはあ……キセキだからであって……キセキじゃない女の子には、必要以上に近付かないようにしてる。アチャモは友達だから必要以上とかなないけど」

「キセキさんには必要以上近付いてるの！？ええ、お互い思いあってるの！？」

チコリータの変な思考にナイトはジタジタになる。

「そんなことはないけど……。てか、なんでそんな思考になる

んだ？」

「えーキセキさんだからって言ったから。えへへ」

幼いポケモンはいいな、とナイトは思った。

チコリータは、キセキよりも幼いと考えられる。

「なんだ、我は無視か！？さっきから空気扱いではないか！」

「おっさん……うるさい」

「なむ！？だれがおっさんだ！！」

ナイトはメガニウムの話を無視して、チコリータと雑談している。
メガニウムはナイトを見てブツブツ言っている。

「じゃあ……俺は準備があるから」

帰ろうとした時、二匹にがっかりと腕をつかまれた。

「いや、まだ話は終わってないだろう」

「そうだよ。まだまだ聞きたいことがあるんだから♪」

じりじりと詰め寄ってくる二匹にナイトは恐怖を感じ、苦笑した
あと、もうダッシュして逃げた。

「あ、逃げるな！それでも男か！？」

「男だよ！ヤバい時にはすぐ逃げる！これ、基本！」

そうして三匹は夜になるまで走り回っていたという。

b a n g a i h e n「疲れた理由は……（後書き）」

メガニウム「なんなんだ？これは」

番外編だよ。b a n g a i h e n ♪

チコリータ「裏話とかしないの？」

探検隊がもうちょっと進んだらね。

チコリータ「ドンドン進めなさい！」

分かりましたよ……。

bangaihen 君におくるメッセージ (前書き)

ひさしぶりの花言葉です！

少し変ですが……。

これで感動してくれたら、嬉しいです！

bangaihen ー君におくるメッセージ

これは、キセキとアチャモがナイトに出会う少し前のお話……。。

今日は依頼をして帰ろうとしていた時だった。

「ね、キセキ。あそこに誰がいるよ？」

アチャモが向いている方を見ると、困っている様子のポケモンがいた。

「誰だろう？困っているみたい。助けなくちゃ！」

探検隊は困っているポケモンをほおっておけない。

これが役に立つ時と、役に立たずに危険になる場合もある。

困っているポケモンは全てが善とは限らない。困っているポ

ケモンにもやはり善か悪かがある。善の時はいいのだが、悪の

時は騙され攻撃をうけたり、何かを盗られたりして危険だ。

だが探検隊はそんなことで嫌とはいってられない。

危険をしても宝を狙うように、危険をしても相手を信じ、相手のポケモンを守り、助ける。

探検隊になるにはこれが必要なんだろう。

「どうしたんですか？困っている様子ですが」

「え！？あ、ああ……。うん。探してるものがあるんだけど見つからなくて。だからここをうろうろしてただけなの」

アチャモが話しかけると相手のポケモンは少しびくん、と震えた。驚いているのか、怯えているのか分からないが、喋り方もそんなに怯えてはない様子。

「探しもの……。ですか？」

「うん。ここにあるはずなんだけれど」

相手は、喋っていても目をキョロキョロと動かし、返事も適当とはいわないが、適当に近い返事だ。

「何を探しているのですか？」

「……そんなの聞いてどうするの？君達に関係ないでしょ？」

相手の発言にキセキはびくん、と反応する。

「関係ないけど……。困っているポケモンを見たらほおっておけないの！何か役に立てればと思ったただけだよ！」

少し苛立ったように言うキセキをアチャモは止めようとしたが、相手のポケモンが少し笑った。

「君達って面白いね！探検隊みたいだ」

相手は二匹のことを探検隊と知らないようだ。
カーレッヂは新米だから有名ではないのだが。

「君達、手伝ってくれるのかい？」

「え、うん。それで何をすればいいの？」

キセキが問うと相手はににこと笑い、ある一枚の写真を取り出した。

写真には一つの花が写っていた。

「これは花？」

「そう！これを探してるんだ。確か……イブキって花だと思う。頼まれたんだ。これを見てみたいからとってきてほしいって」

相手はどこか切なそうに言った。

でも数秒すると笑顔にもどりまた話しかける。

「そういえば君達の名前は？僕はバルビート」

「私はキセキ。こっちが相棒のアチャモ。二匹で探検隊をするの。チーム名はカーレッヂ！よろしくね、バルビート♪」

バルビートは二匹が探検隊ということに驚いたが、しばらくする

と探検隊がいた方が助かるという考えになっていた。

「イブキ……どうしてこの花が必要なの？」

キセキが聞くと辛そうな笑みをうかべた。そして元氣なく言った。

「僕の幼馴染みの……イルミーゼが花が大好きなんだ。でもさ……イルミーゼは外に出ることができないんだ。体が少し弱くて……だから花を摘んでイルミーゼにみせてやるんだよ」

「え……あ、あの……ごめんね！？ 変なこと聞いて……」

バルビートは気にするな、と言ったがキセキは少し後悔していた。

どうしてあんなこと聞いてしまったのか、と。

それはアチャモも同じだった。

そんな空気を気にせずにバルビートが言った。

「もしもだけど、君達の大切なポケモンがもうすぐいなくなるって言われたらどうする？」

「……そんなの分からないよ。でも、もし……あえないのなら……相手のためにできることをするかな」

余計重くなった空気はどうしようもなく、しばらく沈黙が続いた。

「イブキの花……ないね」

諦めかけた時に目立つ一つの花があった。風にそよそよと揺れている。今にも飛ばされそうなほど揺れている。

バルビートはイブキの花の近くまでいき、丁寧に摘む。

「ふう〜、見つかったね！」

「君達のお陰だよ！何か礼をしたい！だけど僕は何も持ってないし……そうだ！僕の家においでよ！何かごちそうするよ！イルミ―ゼも喜ぶだろう！」

バルビートはキセキ達を家に招こうとしたが、キセキ達はギルドに修行しているので勝手な行動はできない。

「なら、明日はどうだい？今日はもうおそいし……明日なら、仕事を早くおわらせればいいんだし！じゃ、明日ギルドへあいにくよ！」

どうしてこんなにも拘るのか……

不思議に思ったが気にすることはないと考え、特に気に止めないことにした。

翌日、バルビートは迎えにきた。

バルビートの家はギルドからそんなに離れていない。歩く
と数分で行くぐらいだった。

少し森にかこまれている家だ。

木でつくられている家で、甘い蜜の匂いがする。

バルビートは静かにドアを開け、布にくるまったポケモンに声をかけた。

「イルミーゼ、おとなしく寝てたかい？」

「バルビート！ うん、寝てたよ。……ん？ そちらのポケモンは？」

イルミーゼはバルビートが声をかけると、布を蹴り飛ばしてバルビートのそばに寄り、キセキ達をみる。

「探検隊のカーレッヂさんだよ。こっちがキセキさんで、そっちがアチャモさん！ 昨日、イブキの花を探すの手伝ってくれたんだ！」

「そうなの。あ、ワタシはイルミーゼ！ バルビートの家で一緒に住んでるの。ゆっくりしていいってね」

バルビートはイルミーゼの布をベッドの方に戻して、イルミーゼもベッドに戻っていった。

イルミーゼのベッドの近くには花瓶にいれられたイブキの花が飾られていた。

バルビートはイルミーゼの部屋から離れたところでキセキ達にイルミーゼのことを話した。

「イルミーゼと僕は孤児院で出会ったんだ。両親はいないし、友達もできなかった。だけどイルミーゼはまるで家族のように接してくれてさ。一番の理解者だった……。兄妹のように育ったんだ。だけどイルミーゼは体が弱かった。だから僕は孤児院を抜け出して、一緒に住んでいる。イルミーゼは、誰かと接するのが大好きでさあ。だから君達と接して、元気にさせてあげたかったんだよ。イルミーゼも喜んでいるから……。ありがとね」

バルビートは優しく微笑んだ。

イルミーゼが恋愛として好きではなく、家族として好きだから喜ぶ姿をみるのは嬉しいのだろう。

バルビートはリングとオレンの実を搦り潰したものをイルミーゼの部屋に持っていく。

「イルミーゼ、これを……」

バルビートはイルミーゼをみた瞬間、器を落としてしまった。器はパリンと音をたてて粉々になった。

「イルミーゼ！？大丈夫！？」

イルミーゼはバルビートをみた。

ベッドには赤いものがついていた。

赤いもの……イルミーゼの血だろう。

「バルビート……ワタシ、もうすぐ死ぬんでしょう？いつまで保つのかな、この命……」

「ば、ばか！何てことを言うんだ！死なない！！イルミーゼは

死なない!!」

「そうだ……ね。ごめん、ワタシ疲れたから少し部屋からでていってくれるかな……」

イルミーゼはそう言う布に顔をうめる。バルビートもでていき、キセキ達はそのあとを追う。

バルビートは家からでると、たえていた感情があふれだした。

「うう……イルミーゼ!! ごめん、僕が泣いちゃいけないのに……どうして僕は……助けてあげられないんだよ!!」

「……どうしたの? バルビート?」

追いかけてきたキセキ達にバルビートは打ち明けた。

イルミーゼの命はそんなに長くないことを……。

「医者に言われたんだ。もう、どうにもならないから死をまつだけだってね。でも、イルミーゼは頑張って生きようとしている! そんなの……諦めたくないじゃないか! イルミーゼは生きてくれるって信じていたいじゃないか……」

バルビートは泣き崩れてしまった。

大切な者が、もうすぐいなくなるかもしれないのだ。

一緒にいられる時が、おわるかもしれないから。

しばらくしてイルミーゼの部屋の前にいき、ノックをしてみるが

返事はない。

ドアを勢いよく開けるとイルミーゼは冷たくなっていた。息もしていなかった。

バルビートはイルミーゼを抱えて、頬に冷たいものがぽろぽろとあたった。

イルミーゼの頬にもそれがあたる。

それは涙だった。

大切な者を失ったかなしみの涙……。

「頑張ったな。イルミーゼ、僕といてくれてありがとう。これからは頑張らなくてもいいんだよ。天で、ゆっくりすればいいんだ」

バルビートはイルミーゼを抱えたまま、声をださずに涙をながした。

それから数日たち、イルミーゼの墓もつくられた。

カーレッチはバルビートを訪ねた。

「バルビート！きたよ」

「ひさしぶりだなあ。二匹とも」

バルビートは随分強くなった。

イルミーゼがいらないからイルミーゼのために毎日を生きている。

「そうだ！イブキの花言葉知ってる？」

「……知らない。何ていうんだよ？」

「それはね……『あなたを守る』だよ」

「……あなたを守る……」

それはイルミーゼが最後にのこしたバルビートへのメッセージなのかもしれない。

バルビートはそれを聞くと、微笑みながら涙をながした。

イルミーゼを失った時とは違う、懐かしそうな涙だった。

bangaihen 君におくるメッセージ (後書き)

どうでしたか？

イブキの花言葉と今回の話はあっているのか微妙ですが。

花が関係する話を書いていると花を育てたくなります。

育てたいですが、お金が…… (泣)

u r b a n a s h iーキャラ変更とチーム名（前書き）

裏話です。

ある方にもきていただきました♪

ある方とは……ちよつといたいキャラ？

アチャモ「ではどうぞ！」

urbanashiーキャラ変更とチーム名

ひさびさの裏話だねえ。

キセキ「うん。何を話すのかな？」

いろいろと。

あ、もうすぐあいつらがくる時間だ！

アチャモ「あいつら？」

うん。娘を愛しすぎてるあのポケモン♪

メガニウム「きたのだよ！さて、なんだここは？」

おゝきたねえ♪

料理もしているよ♪メガニウムの好きなアセ○ラもあるよ。

メガニウム「うむ。あるのか！」

いろいろとメガニウムに関してすることがあるからね。

さて、グラタンでも食べて聞いてくださいな。

三匹『あ、これ美味しい！』

まずメガニウム変な奴にする予定でした。

キセキ「（今でも少し変だと思うけどね……）」

でもそしたら話とそれてしまうと思い、娘を愛する設定にしました。

アチャモ「へえ〜！……あち！舌火傷したかも……」

グラタンは気をつけて食べてね。
はい、ジュース。

他には……

キセキ「あ、ならどうしてカーレッヂっていうチーム名にしたの？」

本編でもあったけど「勇気がある探検隊になれるように」で。

ほかにも候補はあったんだよ？

「シャイン」とか「ブレイブ」、「ブレイヴリ」とか。
でもしっくりこなくてね……。

それでしっくりきたのが「カーレッヂ」だったんだよ。

キセキ「そうなのか〜！……ん、マカロニ美味しい！まいう〜♪」

まいう〜って……。

アチャモ「作者は、小説を書く時に気をつけてるところはどこのの？」

そうだねえ……とりあえず『分かりやすく伝える』ことと『キャラの個性を大切にする』ことかな。

その場面はどんなところなのかとか、こんなときにこのキャラはどんなことを考えているのかを分かりやすくするようにしています。

勿論、分かりやすく思う人と今の文章じゃあ分かりにくいと思う人にわかれると思います。

読んでくれている皆さんには分かりやすく伝えたいのでどうやったら伝えやすくなるか考え中です。

キャラの個性は……皆さんが好きな部分を生かすようにしています。

このキャラのああゆうところが好きだ、とかあのキャラのあの性格が気に入っている、とかですね。

例えば「キセキの明るいところが好き」という意見がきたらなるべく明るいところを生かしていきます。

それでもっとキャラ達を好きになってくれたら嬉しいです。

キセキ「そうなんだ……。ちなみに私はどんなところが好きって意見きてる？」

「一緒にいると和みそう」とか「明るく元気なところ」だね。

アチャモは「自分の弱さを頑張ってなおそうとするところ」があったよ。

キセキ「感想とかで書いてくれたりするの？」

感想で書いてくれる時もあればメッセージで送ってくれたり。

ありがたいよ。

いつかどのキャラのどんなところが好きかアンケートでもやってみたいなあ、とは考えています。

アチャモ「作者、企画とかしないね？ コラボとかしないの？ ワタシ、

皆とあいたいな」

してみたいと思うよ？

でもね、少し不安で……参加してくれる人いるのかな、って思ったり。

キセキ「はあ……」

アチャモ「やればいいのになあ」

……じゃあ今回の裏話はここまでにしますね。

二匹『あ、まだグラタン食べてないよ！』

まだあったの！？

u r a b a n a s h iーキャラ変更とチーム名（後書き）

アチャモ 「探検隊は？」

ちよくちよく書いてるよ。
もうすぐ更新できそう。

アチャモ 「あ！アセ○ラ飲み忘れた！」

また！？

bangaihen 君に伝える最後の言葉（前書き）

冒険日記、一ヵ月放置してました……。

何を書こうか悩んでしまって、結局『君におくるメッセージ』のイルミーズの気持ちになってます。

楽しんでくれたら嬉しいです。

bangaihen 君に伝える最後の言葉

君に出会えて幸せだったよ？

いつも励ましてくれて、世話をしてくれて……。
今でも大好きだからね？

「イルミーゼちゃん、身体の具合はどうかしら？」

「今日は……良い気分だよ……」

ワタシは孤児院にいるイルミーゼ。

身体が弱くいつも部屋で寝てるだけ。

部屋から出ることなんて許されない。

食事とかはワタシの世話をしてくれるポケモンが持ってきてくれる。
る。

誰かと関わるのが嫌いで、面倒臭いと感じていたあの頃。

貴方と出会って大きく変わったんだよ……？

夜は好き。

空に星がキラキラしててワタシもいつか輝けたらいいと思った。
するとドアが開いて知らないポケモンがいた。

「……んりゃ？間違えた？」

ワタシと似たような外見で寝ぼけているような。
間違えたならはやく帰って……。
一人がいいから。

「あんた誰？僕はバルビート♪」

「イ、イルミーゼ……」

にこにこしながら言うのはやめて……。
こわいの、関わるのが。
いつか別れがくるから。

「身体が弱い奴か？けっこー噂になってんぞ？ずっと部屋に閉
じこもった奴がいるって」

な、なんか暗いポケモンみたいな言い方……。
外には出れないもの、仕方ないよ。
君は……「またな」とだけ言うど部屋を出た。
またな、つてことはまた来るの？
でも……来て欲しいかもしれないと思う自分がいた。

「イルミーゼは花が好きなのか？」

ベッドで安静にしろといわれ、ずっと本を読んだ。だけどいつの間にか君がきてた……。

「うん……。花言葉を調べてるの。面白いよ……。？」

「そーなのか？……安静にしてろよ？」

君は出ていき、しばらく静かな時間が流れた。

でも静かな時間はいつものこと。

昨日の夜出会い、朝方にまたあいにくてくれた。

優しいのかな？

単なる気まぐれなのかな？

「イルミーゼ♪花を摘んできた！花言葉はなんだー？」

ワタシは驚いた。

出て行って僅か十分で戻ってきた。

それにワタシは外にでたことがないので花は本でしか見たことがない。

花ってこんなに綺麗なの？

「チューリップ……『美しい瞳』が花言葉」

ワタシは、外を知りたいと思った。
出たいと思った。

孤児院こにちでは外に出れない。

ワタシは……孤児院を抜け出したくなった。

だけどそんなこと出来ないから。

我慢するよ。

「イルミーゼの願いは何？」

「ワタシは……外の世界を知りたい。孤児院から抜け出せたらいいのに」

バルビートは「うーん」と顎に手をおき、考えるように何やら呟つぶやいている。

ワタシの願いは叶わないよ。

孤児院を抜け出すにはこの身体じゃ厳しいもの。

だから願いじゃなくて『夢』だよ。

「そうか。じゃ、また明日！」

「うん。また、ね」

バルビートは手を振り、そんな君にワタシは癒される。

おかしいね？君と出会って一週間も過ぎてない。

だけど君と長く過ごした気がするの。

孤児院でもいい。

だから時々きてね？ワタシの友達として。一人だったワタシに

君がいてくれるから、ありがとう。

いつかこの想いも伝えるからね。

とびきりの『感謝』を。

バルビートはその日からずっと来てくれた。

だからかな。誰かと関わるのが楽しく感じてきたの。

君となら笑えるよ。

初めて思った。

もっと生きたいと。

君に心を開いていくのが分かるよ。

だからささいなことでも話を聞かせてね。

「イルミーゼちゃん、最近明るくなったわねえ？良いことでもあったのかしら？」

「友達が出来たの。いつも来てくれていろんな話を聞かせてくれるの。外のものも見せてくれるんだよ」

世話係りのポケモンはワタシに薬を渡すと頭を優しく撫でてくれた。

いつもならワタシは素っ気なく「ありがとう」とだけ言い、後は全く喋らないだろう。知らなかった。こんなに誰かと関わるのが楽しいだなんて。

もっと明るく生きていたほうが得なんだって。

ワタシ、変わったよ。

バルビート、ワタシに沢山のプレゼントをありがとう。

「バルビート、毎日あいにくれてありがとう。ワタシ、退屈な毎日が待遠しくなったの」

バルビートは驚いたように手にもっていたお菓子を落としてしまいそうになるが慌ててワタシが受け止める。

「イルミーゼ！外に行かないか？」

「え？でも……怒られるー」

ワタシが言いかけているのにベッドからワタシをだすと手を掴み走っていく。

走るのも初めて。部屋の外に出るのも初めて。

外に出ると微風が心地よく顔や体にあたる。

そうか、風ってこんなに心地よいんだ。

木や草花、楽しそうにお喋りしてる皆。

これが外の世界ーなんて綺麗なんだろう。

もっと見たいよ。

世界中を見たい。

「イルミーゼ、森に行こう。僕とイルミーゼの家をつくったんだ！だから孤児院じゃなく、その家に住まないか？」

「うん！でもしっかりワタシの世話をしてね？バルビート」

自分でもにこにこしているのが分かる。

嬉しいよ。

ワタシの願いを叶えてくれたんだね。

まるで兄のような君。

だけど途中で何処かに行ったら嫌だから。

ずっと傍にいて、沢山お話聞かせてね？

あの日からもう何年経ったのだろう。

幸いワタシはまだ元気で、平凡だけど掛け替えのない愛しい日々。君がワタシの為にカーレッヂさんを連れてきてくれた。

ワタシが誰かと関わるのが好きなのを覚えてくれたんだね。だけどワタシの命はもうすぐ消える。

自分でも分かるから。

だから必死に君に伝えたい言葉を、花言葉で伝えることにするね。その花は『イブキ』。花言葉は『あなたを守る』。

孤児院で本を見ていた時、偶然見つけたの。

だから頼んだ。

「イブキの花が見たい」と。

そしたら君は快く摘んできてくれたね。

君がいない時、少しずつ書いた手紙。
どうか伝わりますように。

書いている途中、ベッドに血をはいてしまったから、君が来る前に隠そうとしたけど……器がパリンパリンとわれていた。

みると君がいたから、もう隠せなかった。ワタシが君を傷つけた言葉を言うところかへ行ってしまったから、近くにいたカーレツヂさんに頼んだ。

「カーレツヂさん、お願い。ワタシがいなくなった後、バルビートがワタシのぶんまで生きてくれていたら……イブキの花言葉を教えてあげて。ワタシからの……メッセージとして」

カーレツヂさんは黙って頷いてくれた。

カーレツヂさんがバルビートを追いかけていった後、ワタシはイブキを見つめていた。

「生きたいよ……ワタシはもっと生きたいのに！君の傍に……隣でずっと笑っていたかったのに……」

涙があふれる。

仕方ないのに、もうすぐ命の灯が消えてしまうのに……。

ワタシはそのまま目を閉じた。

夢にでてきた君に言葉をそえて。

――沢山ありがとう。君が君らしくいれるところで笑っていて。こんなに、こんなに沢山の時間をありがとう。

どうか、君に伝わりますように。

どうか、君が幸せになっていきますように。

辛い時にはワタシが傍にいるよ。

君はずっとワタシを守ってくれたから、今度はワタシが君を守るよ。

君に伝えるメッセージー

bangaihen 君に伝える最後の言葉（後書き）

イルミーズ、最初は暗い考えなんですがバルビートと出会い心が成長していく……はずなんですけど難しい！

変化していく想って難しいです。

単純になりましたが予定ではしっかり詰め込もう！と意気込んですました。

でもこんな話を書くのも面白いですね！

また書きたいです♪

bangaihenーこの想いを伝える頃は(前書き)

久々の冒険日記です。　うーん、マグマラシは扱いにくいキャラですね。

パチリスの方が書きやすいかもしれません。……パチリスはソファのことで頭がいっぱいそうですけど。

bangaihenーこの想いを伝える頃は

君が俺の前から消えて時間ときがたった。

君がいなくなってから時間は残酷なんだろうかー

「マグマラシ、カーレッヂさんが時空ホールに連れていかれた
そうですよ」

俺の相棒パートナーはそう伝える。

パチリスは凄く汗をかいていて、息も切れている。

広場から走って秘密基地こくしに來たのだろうな。

かなりの距離があり、広場に行くのは好きじゃない。

けど、逢いたい奴がいるから、トレジャータウンにあるギルドを
目指して頑張れる。

「はあ？何言ってるんだよ？時空ホールがこんなところに来る
ワケねえじゃんー」

正直にそう思ったが、パチリスは天才だ。

未来のことを案じてする行動もある。

……だからパチリスが嘘をつくなんて有り得ない。

カーレッヂが時空ホールに連れていかれただと？

何が目的なんだ？

あいつをーアチャモを傷付けることだけは絶対に許さねえ！

「ヨノワールが今日未来世界に戻るんです。その為に時空ホールを使い、皆さんにお別れを言った後にカーレツヂさんだけを前に呼び、引きずって時空ホールに連れて行ったとされています。遂に本性を表しましたね」

「……………なんでそんな落ち着いてんだよ？キセキがアチャモが未来世界に連れていかれたんだぞ！？助けようと思わねえのかよ！？」

パチリスはソフィアしか見てねえのはしってたけど、お前を助けたキセキが殺されるかもしれねえのに！

「無理なんですよ。時空ホールを開くのは空間を切り裂くようなものですから。空間を切り裂き、未来世界へと繋がる道を開くには空間の神の力が必要です。空間の神じゃなくても時間ときを操る伝説のポケモン、ディアルガの力が必要です」

空間の神はどこにいるかも分からない。
ディアルガも伝説の地に行かなければ逢うことすら出来ない。

「ヨノワールが過去世界に来るにはディアルガの力が必要です。ディアルガの時間ときを操る力でこの世界に送り込んでもらったのですよう」

分かってる。そんなこと。
ディアルガは時間ときを操り、過去や未来に簡単に誰かを送り込める。空間の神は空間、つまりは時空を操り、空間を使いどこにでも行ける。

似たような力だがまったく違う。

この伝説のポケモンの力があればアイツの元にすぐに行けるのに！！

「でも、これはチャンスなんですよ」

嫌気のない綺麗な笑みでパチリスは言う。

何がチャンスかまったく分からない。

けどコイツの言うことで間違ったことなどない。

だから信頼は出来る。

けど、全然不安は拭えない。

――もしかしたらアイツを失うんじゃないかと今までに感じたことのない想いが動き出す。

「キセキさんと、ジュプトルの絆が深まるかもしれませんがね。

あの時のように」

「それは人間だった時の話だろ！？キセキの記憶が再び戻るとは思えない！」

パチリスに反発するとまるで俺にケンカを売っているように笑う。

こいつは性格は良いのか、悪いのか未だ分からない。

腹黒いのではないかと時々思わされる。

「確かにそうです。キセキさんは記憶を失い、新しい相棒もいます。けれどキセキさんとジュプトルは運命の相棒なんです。だからきつと巡り逢う運命なんですよ。まあ、キセキさんとアチャモさんは運命を覆すような相棒だと思いますよ。奇跡と言うんですかね」

パチリスの言いたいことが全く分からない。

それにこいつはどこからどこまで知ってるんだ？

でも、コイツとは幼い頃から一緒にいたんだ。

パチリスは俺の大切な相棒であり、親友でもあるんだ。

パチリスが俺を親友と思ってくれてるのかわかんねえけど……。

パチリスが詳しいのはきつとソフィアの為だ。

ソフィアを見付け出す為に村にあった資料をひたすら調べ、天才と呼ばれるようになった。

だからパチリスも血の滲むような努力をしたんだ。

パチリスがこの世界について詳しいのもそのお陰なんだよな。

「マグマラシがそんなに焦るのはアチャモさんが危ないからだ
と分かりますが……どうして自覚しないんですか？アチャモさんが
好きだと」

「……………は？」

な、な、何言ってるんだ！

好きだと！？

そんなことがあるわけねえし！？

大体自覚とか何だよ！？

「まだまだ時間が必要みたいですね？楽しみにしてますよ、ど
んな展開になるか。いつ恋と自覚するのか」

こいつ……楽しんでやがるな！？

お、俺は……恋なんかしてねえ！

けど、ひとつ分かるのは……アイツをずっと守りたいこと。
守りたくて仕方ないこと。

「俺はアイツを……」

守る。

そう言おうとしたが口を閉じた。

だって一番最初に君に言いたいから。

「お前を守る。失ったものはみんなうめてやる」と。

いつ言おうか迷うけどそれを言うのはきつと。

あの瞬間なんだ。

bangaihen この想いを伝える頃は（後書き）

私は中途半端に終わらせるのは好きです。

でもそれじゃ満足いかない人もいますよね。 なのでこの続きは

本編の方で書かせていただきます。

マグマラシの言う『あの瞬間』は大体予想がつくのではないかと
思います。

次は何にしようかなあ……。

bangaihen―感謝をこめて（前書き）

小説を書き始めて今日で一年になります。

企画もいいな、と思ったのですが私は小説が書きたくてこのサイ
トに登録しました。

なので感謝短編にしました。

皆さんへの感謝が少しでも、伝わりますように。

bangaihen―感謝をこめて

―感謝ってどうしたら伝わるのかな。

言葉では恥ずかしくて上手く伝えられない。　　どうしたら、君に
上手く伝わるのでしょうか

キセキは一匹で海岸を眺めていた。　アチャモと二匹でよく来る
場所だけれど、今日は一匹で来たかった。

夕焼けの太陽が水面に映り、朝は青い海が今はオレンジ色の海に
なっている。

「どうやって伝えようかなあ……」

キセキは頭の上になる甘い香りの葉を海の水で冷たくなった風に
弄ばせていた。

風がその甘い香りを鼻まで運んでくれる。

だがキセキは真剣に悩んでいた。

―アチャモにはいつも助けてもらってばかり。　私は感謝のひ
とも言えてない。……でもどうやって伝えればいいのかな……。

キセキは深くため息をつく　アチャモの言葉を沢山思い出してい
た。

『ワタシはキセキのお陰で探検隊になれた。ありがとうキセキ』
アチャモはいつもにこにこしていて「ありがとう」とよく言う。

キセキはお礼を言われることはしてないとずっと思っていた。当たり前のことをしたただけでお礼なんて言わなくていいのに、と。でも本当にお礼を言わなきゃいけないのは自分なんだ、と心では考えていたがアチャモをいざとするとやはり恥ずかしいのと照れくさくて言えない。

軽く「ありがとー」なら簡単に言えるがそれは軽すぎる。本当の感謝なら心をこめてするものなんだから。

「……言えるかな？」

今まで何度も言おうと試みたがその度言えない。アチャモだからこんなに緊張するのもかもしれない。こんなに大切だからいざとなると言えないのかもしれない。アチャモは失いたくない。アチャモがいなくなったらきつと自分じゃなくなってしまう。

「……んー。物で感謝をあらわすのはだめだよねえ……」

キセキは苦笑する。一瞬物にしようかと思ったがそれはいいけないと思い、また悩む。

「私から言わないと意味がないもんねえ」

自分の声でちゃんとアチャモに伝えなければいけない。

キセキはううん、と考えを巡らしているうちに辺りが暗くなっていることに気付く。

早くギルドに戻らないと怒られるなあ、と呟き立ち上がるとギルドの方へ歩き出す。

暗くなっているからかトレジャータウンにいるポケモン達は少ない。

さっきまでオレンジ色の海は太陽が沈んだので青と黒がまざったようなーそんな海になっている。

太陽のかわりに月が出てきている。

星もちらほらでてきており、海にその輝きが映り薄暗い海に白い粒があり、見とれてしまう。

キセキは流れ星に「ありがとう」とこめて相手のもとに届けられたらなんていいんだろう、と思った。

そんなことは出来ないけれど。

キセキはぐうう、とお腹がなり、顔をほんのり紅色に染めて早く夕食を食べようと思い、そそくさとその場を去る。

それに全員がそろわないとギルドでは夕食が食べれない。全員が揃うまでまち、遅れた弟子に文句が始まるのだ。^{ブライング}

そんなことにはなりたくない。でも自分が一番遅れているだろうとなんとなく分かる。これではブライングをあびるのはキセキだ。

今は別にいいか、と誰にでもなく呟くとキセキはギルドに入って行った。

「遅いぞ！どこほつつき歩いてんだよ！」

やはりブライングだ。でもいい。

キセキは「ごめんね」と謝ると早速自分の指定席に座る。

今日も様々な種類のグミがどっさりと盛り付けられている。^{テーブル}

机のちょうど真ん中には木の実が彩り豊かに並べられている。

木の実はい早い者勝ちだ。食べたい木の実があったら素早くとらないと他のポケモンにとられてしまう。

グミは決まった量を与えられるのでそこは平等だ。

「キセキ、遅かったけどどうかしたの？」

アチャモが心配そうに聞いてくる。

アチャモはキセキの隣が指定席。

相棒同士、気遣ってこの席にしてくれたのかもしれない。

キセキは「散歩したら遅くなったただだよ」と返事する。

これで全員揃ったのでやっと夕食。

夕食が始まると早々に木の実の取り合いが始まった。

一番になくなったのはモモンの実。

甘いものはやはり人気がある。

キセキはモモンの実を密かに狙っていたのだがこんなに早くなくなるとは思わず啞然とした。

悔しくてグミを一気に食べると喉に引っ掛かりせき込む。

弟子はくすくすと笑い、誰かが「食い意地はってるからだ」と突っ込むと笑いを堪えていた者は途端に大笑いした。

キセキは寝る時間にずっと部屋から見える月を眺めていた。

隣ではアチャモが寝息をたてて寝ている。

気持ち良さそうに寝ているので起こさないように窓に近付き、空を見ていた。

ギルドに戻ってからずっと「ありがとう」と言おうと思っていたのに、中々タイミングがなくてまた言えずじまい。

キセキはため息をついた。

今日で何回目のため息だろうか。

何回も何回も今日は悩んできた。アチャモは知らないだろうな。君のことで沢山言えない気持ちがあること。

本音はちゃんと言ってるけど、言えないのは感謝の気持ち。それ以外はなんでも言えるのに。悩みも、落ち込んだ時も、悲しい時も。

キセキはそう思っているとふとある疑問がうかぶ。

「アチャモは、どうしてあっさり言えるのかな？悩んだりしないのかなあ」

小声で聞こえないように月に呟く。

アチャモはキセキのように悩んだりしないのか気になった。でもそんなことを聞いたら不思議に思われるから言わない。

キセキはいつまでも考え込んでいたら眠れないと気付いて何もなかったように目を強く瞑る。

目を瞑っているとそのうち意識を失っていった。

気がつくと夜が明けていた。

太陽の光が部屋に入り込み、あたたかい光の中で目が覚める。

アチャモはもう起きており、目が合うとにっこり笑い「おはよう」と挨拶をかわす。

キセキはまだ眠たいのか目はトロントロンと今にも寝てしまいそうだ。

キセキに苦笑しながらもアチャモは「もうすぐ朝礼が始まるよ」と声をかける。

キセキははっと目を大きくさせるとリボンを身に着ける。

アチャモは準備が出来ているようでキセキが準備を終えると「行こうか」と朝礼が行われる場所に行く。

弟子は集まっており、プクリンももういた。朝礼を終えると依頼を受けに行く。

今日は簡単な依頼にしようというアチャモの提案で近いところのダンジョンにする。

その依頼は簡単なもので道具を届けるものだった。

依頼があまりにも早く終わりすぎたのでアチャモは「こんなことならお尋ね者ポスターでも受けておけばよかったね」と笑う。

ギルドに早く戻るのもなんだか乗り気ではないので二匹は海岸に行くことにした。

まだオレンジ色に染まってない海は透明な綺麗な青だ。

アチャモは嬉しそうに笑いキセキに「ね」と話をかける。

「キセキ、海岸に来てくれてありがとう」とキセキに言うとキセキは驚いたようにアチャモを見る。

アチャモはにこにここと笑っているだけ。

キセキは聞いてもいいか迷ったが今、一番聞きたいことを聞いてみた。

「アチャモはどうしてありがとうって言えるの？そ、その、恥ずかしくないの？」

キセキが聞きにくそうに言うとアチャモはそうだね、と言うように悩む仕草を見せる。

けど、アチャモはすぐに返事を返す。

「だって、キセキに言いたいんだもん。ワタシはキセキに助けられてばかりだから」

そんなことない。

助けられているのは私だよ。

キセキは出そうになった言葉を必死に喉の奥におさえる。

そうしたらまたアチャモが「ありがとう」と言うような気がしたから。

今度はキセキが言う番だからアチャモに言われたら何も言えない。

「私も、アチャモに助けられているよ。その、アチャモが凄く大切だから。ありがとう」

キセキは恥ずかしそうに頬を薔薇色に染めて笑った。

あんなに悩んでいたのが嘘のように素直に言えた。

この出会った海岸に来ればなんだか自然に素直になれる。

この場所は特別だからかもしれない。

アチャモはぱちくりとしてしばらく固まる。動いたと思ったら夕焼けの海に似ているオレンジ色の体を紅くさせて困ったような表情をする。

キセキにとってそれは予想外でアチャモが可愛くて笑ってしまう。まるで妹のようなアチャモ。でも妹ではなくて、大切なポケモン。

恋愛では重すぎてただの友達では軽すぎる。

この関係をなんて言えばいいのかなんて分からない。

でもうかんだのは『奇跡の相棒』。

友達というより相棒というほうがしっくりくる。

友達だけでは軽すぎる、ややこしい関係。

「キセキからそんなこと言われるなんて思ってたよ……。
びっくりしたよ」

アチャモはだいぶ落ち着くとゆつくりと言葉を紡ぐ。

キセキは「私だってアチャモがそんなに驚くとは思わなかった」
とおかしそうに笑う。

アチャモは海を見て歓声をあげる。

キセキもつられて海を見るとそこにはオレンジ色の海が。

そして水面に二匹の笑い合ってる姿が映っている。

アチャモは「ギルドに戻ろうか」とキセキに言う。

キセキも頷き、ギルドに戻る最中、アチャモは「今日は喉に詰
めないようにね」と笑った。

キセキは顔を真っ赤にしてアチャモは満足そうにしていた。

――君に感謝をこめて、ありがとう。

bangaihen―感謝をこめて（後書き）

いつもポイントを入れてくれる方、感想を書いてくれる方、お気に入り登録してくれる方。読んでくださる皆さん。

本当にありがとうございます！

皆さんに、幸せが訪れますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9221m/>

ポケモン不思議のダンジョン 冒険日記

2011年10月7日08時17分発行